

## 第14回 ダイワハウスコンペティション 作品募集

太っ腹な人のように、度量が大きく大胆で心の広いことを住まいで表現すると、どんな家になるでしょうか。

今社会は、価値観や生き方が多様さを増している一方で、さまざまなルールが敷かれ、まわりの人と少しでも異なると生きにくい、窮屈で不寛容な状況が少なからずあります。そこに風穴をあける

ような、他者を拒まない寛容さをもつ家として、「太っ腹な家」をとらえてみてください。それは、日々変わる人の気分や変化に寄り添える許容力のある家であり、自らの思想をおもいきり表現し行動できる自由な家ともいえるかもしれません。そんな寛大な家を考えることで、現在の社会や都市の中で家はどうかあるべきか、この先の希望を見

いだせる家を考えてください。敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て1棟、戸建ての集合、併用住宅、リノベーションなど、形式やプログラムは問いませんが、ひとつの家として必要な空間を提案してください。既存の常識にとらわれず、太っ腹という言葉がもつユーモアや親しみを感じる家の提案を期待します。

テーマ

## 太っ腹な家

## 【審査委員】

審査委員長

青木 淳

建築家 青木淳建築計画事務所  
東京藝術大学客員教授

審査委員

堀部 安嗣

建築家 堀部安嗣建築設計事務所  
京都造形芸術大学大学院教授

平田 晃久

建築家 平田晃久建築設計事務所  
京都大学准教授

南川 陽信

大和ハウス工業 上席執行役員

## 【賞金】

最優秀賞(1点) 200万円

優秀賞(2点) 各30万円

入選(4点) 各10万円

(以上、1次審査通過7作品)

大和ハウス工業賞(1点) 30万円

佳作(10点) 各5万円

総額380万円 ※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通じて、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。

※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金額の配分を変える場合があります。

登録・提出締切：

2018年10月10日(水曜日 消印有効)

<https://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社

後援：株式会社新建築社

大和ハウス工業株式会社

東京都千代田区飯田橋三丁目13番1号 〒102-8112

Tel 03-5214-2181 Fax 03-5214-2296

[www.daiwahouse.co.jp](http://www.daiwahouse.co.jp)

## 「太っ腹な家」



座談会風景。左から、南川氏、堀部氏、青木氏、平田氏。

## 座談会参加者

青木 淳

建築家 青木淳建築計画事務所  
東京藝術大学客員教授

堀部安嗣

建築家 堀部安嗣建築設計事務所  
京都造形芸術大学大学院教授

平田晃久

建築家 平田晃久建築設計事務所  
京都大学准教授

南川陽信

大和ハウス工業 上席執行役員

## 住まいを取り巻く多様な境界

南川 今回で、ダイワハウスコンペティションは第14回を迎えます。前回の第13回の課題「過渡期の家」では、社会が大きく移り変わる中で何を過渡期と考えるのかを自身の問題に引き寄せて定義してもらい、その先に希望を見出すような提案を募集し、優れた案が多数集まりました。今回は、「住宅」を課題の土台として、前回に引き続き内容を深めていきたいと思えます。よろしく願いいたします。

司会 今回は平田さんにテーマ会議の下地として4つのアイデアを用意していただきました。

1. 「寛容な家」(太っ腹な家。他者を拒まない家。人だけでなく、動物や地球環境のさまざまなものに対して寛大さをもつ家の可能性を考える)
2. 「庭としての家」(植物のような家。思い通りにならない植物の存在を見直し、人と都市の関係まで考える)
3. 「愛の家」(愛という意味から家を考える。人だけでなく、昆虫や文学など愛の対象もさまざまに、家の根本に立ち返って愛の家とは何か)
4. 「どこまでが住宅か」(さまざまな過渡期を迎えて価値観が変容している今、住宅のボーダーラインを改めて探ることで、本質的な住宅の意味もあぶり出される。まだ見ぬ、これからの住宅のあり方を考える)

このアイデアを土台に、2018年にどのようなテーマを掲げるべきか、可能性を感じる案についてご意見をお聞かせください。

堀部 最近僕が感じるのは、建築が供給過多となっている現状において、若い人が新しく建築をつくることにリアリティを感じていないということです。これまでのコンペ案でも、熱意と臨場感をもってつくっている作品にリノベーションが多いことも、その現れだと思えます。そういう状況でテーマを設定する時、これまでよりも具体性をもった、取り掛かりやすいテーマがよいと思えます。「寛容な家」にピンとくるものを感じました。建築の第2の人生というか、その時その建主のために設計した家が、次のまったく新しい住まい手やプログラムを受け入れて生き続けられる家。どのような方向性を示せるか議論できるとよいと思えます。

青木 たとえ理屈としては、住宅を都市や近隣と繋げることがよいことだとしても、外から覗かれない閉鎖的な家を望む住まい手が増えています。しかしだからこそ、都市や近隣と繋がる家という理想論を、改めて考える意義があると思えます。住宅を都市に開く必要などあるのか、というようなそもそも論はとりあえず置いておいて、このコンペが住宅を公共性という面からもう一度考え直してみるよい機会になるといいですね。平田さんが挙げてくれた4つのテーマは、そのどれもがそんな住宅と都市の関係に焦点を当てています。4つを大きくふたつのグループに分けるなら、「寛容な家」と「愛の家」は、住宅が他者をどう受け入れることができるか、という問題を扱い、「庭としての家」と「どこまでが住宅か」は、住宅というものの境界が、まさに「どこまで」広げられるか、という問題を扱おうとしています。

南川 「寛容な家」というテーマは、住宅に対して問題意識の高い人にとって入っていきやすいテーマだと思いました。また「どこまでが住宅か」は、自分がサラリーマンとして働いていることもあり、仕事の環境と住環境のあり方についてよく考えるのですが、現在はテレワークや在宅勤務など、いろいろな働き方が増えてきていて環境が変わってきています。住宅自体も当然変わっていく必要がありますから、このテーマは、どこまでが職場かということでもあり、時代が変わっていく中でその境界を考えるよいテーマだと思えます。

平田 「寛容な家」と「愛の家」は内面的な意味での寛容さをかたちにしていくイメージで、「庭としての家」と「どこまでが住宅か」は、どちらかという物理的な視点からスタートしています。その意味で、「どこまでが住宅か」は確かにある種、抽象的なかもしれませんが、「庭としての家」と組み合わせ、物理的な視点に加えて内面的にも掘り下げて提示できると、とっつきやすさと深さの両方を伝えられるかもしれません。「寛容な家」と「愛の家」は、今社会が寛容さをどんどん失っている中で、面白いと思えます。ただ、あまり大上段なテーマだと難しいととらえられてしまうかもしれません。

司会 平田さんにテーマの下地をつくっていただいた中で、「寛容な家」は実は「太っ腹な家」という言葉からスタートしました。自分の土地を開放したり軒先を差し出したりして、人に何かを与えて迎え入れることで自分も豊かになるという気持ちだが、今の時代欠けているのではないかと思います。「愛の家」は第12回のテーマ「都市に住む快樂」から発展して、快樂が愛になるといったいどういうことになるのか。愛することには必ず相手がいます。人間だけでなく動物や学問かもしれません。愛は激しく深いものなので、形に落とし込んでいくとどんなものになるのか。それは一方で暮らしを再び

案ばかりが出てきても困るということです。

**平田** 現実とかけ離れたあり得ないユートピアのような案も嫌ですね。

**青木** たとえば、昆虫という他者を太っ腹に受け入れ、「昆虫と共存する家」という案を考えることはできます。でも、それを本気で考えるなら、蝶はいいけど蛾は嫌で、カブトムシやクワガタはいいけど蜂や蠅や蚊は嫌というわけにはいかないじゃないですか。自然と共生するというのは、誰もが否定しがたいテーマだけれど、それを正直に行うなら、きつと今の「快適な」生活は不可能で、生き方そのものを変えなくてはならなくなる。その生活像を具体的に描ききり、それを提案する本人自身がそういう生活を実践するというのなら話は分かりますが、そうではないとしたらそれは絵空事に過ぎないし、そんなポリティカル・コレクトネスは願ひ下げですね。

**司会** そうですね。それでは第14回ダイワハウスコンペティションのテーマは、「太っ腹な家」としたいと思います。ありがとうございました。

#### 応募者に期待すること

**平田** 「太っ腹な家」というテーマは形のイメージが湧いてしまう言葉でもあります。が、「こうきたか」と驚かせてほしいし、納得させてほしい。そして、太っ腹な人は、正しい人というよりユーモラスな人ではないでしょうか。そういう太っ腹という言葉が持つニュアンスが表現されるとよいですね。

**堀部** ユーモアってとてもよいですね。太っ腹ということはある種の許容力だと思いますが、そもそも許容するということがいったいどういうことなのか、何かを許容するということは、何かを拒否することでもあると思います。開くということは、あるところは閉じなくてはいけない。選び取るということを考えて、その行為が伝わる表現をしてほしいと思います。

**南川** 今の時代に求められる太っ腹さは、度量においても昔とは異なると思います。そうして今までの枠組みを超えてくるような、現代に求められる太っ腹な家を見せてほしいと思います。ぜひ夢のある提案を期待したいですね。

**青木** 朝起きた時に、「今日は昨日とは違う1日になりそう」と思える家はいいものですね。どんな1日なのか、どんな気持ちの1日なのかは、建築が決めることではない。でも、昨日とは違っていていいんだよと背中を押してくれる感じが、太っ腹という言葉の根底にあるように思います。もちろん、これはそのまま案をつくるきっかけにはならない空間の質の話だけど、できあがった案を見て、そんな質があるかどうかで、案の良し悪しを判断してもらいたいですね。

(2018年4月20日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

す。一瞬だけ太っ腹な人っていますよね。使い果たしたら終わってしまうような(笑)。

**堀部** 太っ腹な人って、自分のものがなくなってもよいという犠牲の精神ではないと思います。あまりにも蓄熱が大きいため、放熱だけでみんながハッピーになってしまう。自己犠牲が見えてしまったら、太っ腹とは感じないでしょう。

#### 太っ腹の精神と空間の質

**堀部** 京都の旅館の女将さんが言っていたのですが、鴨居の高さが5尺7寸(約170cm)だと海外から観光に来た人が頭をぶつけてしまうから2mに上げたそうです。そうしたら空間の質ががらっと落ちてしまって、海外の人でさえも頭をぶつけているくらいの方がよいのだと言ったそうです。それでまた5尺7寸に戻したらしいのですが、空間の質の問題と、ユニバーサルな許容力をもつことがどこで着地していくのか。先ほど太っ腹は「細かいことを気にしない」とありましたが、そこを間違えてとらえてしまうと空間の質が高いものが出にくくなる危険性があります。建築はやはり細かいことも気にしなくてはいけない。空間の質を高めつつ、かつ細かいことは気にしない大胆さをもつ案だとよいですね。

**青木** そこでの人の振る舞いを空間によって規制しないように、つまり空間が人の行いに対してルーズであるように細かい配慮をもって設計される、ということですね。先ほど平田さんが言われていたように、規制だらけ、というか、規制から外れることにいつもびくびくしていなければならないような不寛容な社会をひっくり返せるような案が出てくるといいですね。

**堀部** 何に対して不寛容かという、闇に対してではないでしょうか。すべてが透明でないと許されない状況があります。そうしてとんどん世の中から寛容さを引き受けるような闇が消されていくと、陰険な本当の闇が生まれてしまいます。そういう闇のようなものと共生し、受け入れることをテーマに込めることはできないでしょうか。

**青木** 闇というのは、自分の中にあるネガティブな側面や自分でも理解できない不可視の側面ということでしょうか。そういうものが、その人それぞれの個性をつくっているのですけれどね。不可解な闇が忌み嫌われ、皆が楽しく明るくわかりやすい側面だけで生きなくてはならない。そんな同調圧力が闇を消しますね。

**平田** 実際に国と国の境界にある闇を消していったらますますその開きは大きくなってきて、政治家も一線を超えるような発言を口にしてしまっています。そんな世の中で、太っ腹さを考える過程において、必然的にそうした闇について自身に問うことになると思います。

**堀部** 「太っ腹な家」というテーマで、闇を問題視した提案を期待しますね。要は、表層的な明るい部分だけで成り立つ



なりますね(笑)。

**平田** なるほど。家とは、住む人を限定した時に見えてくる概念だとすると、そこから広がりや親しみをもって考えられるテーマとなりそうで、よいかもしれません。

**南川** 「太っ腹な家」は住まい方から環境のことまで広く解釈することもできます。どこまでが住宅かという話にも繋がりますし、そういう意味でもテーマ自体に許容力がありますね。よいテーマだと思います。

#### 住まいに求める包容力

**青木** 先ほど堀部さんは、ある特定の家族のために設計された家が、別の家族やプログラムに引き継がれていくあり方を話されました。これも「太っ腹な家」のひとつの表れだと思うのですが、そういうことが可能になるためには、まずは建築としての魅力がその家に備わっていることが必要でしょうね。住まい手の気持ちや使い勝手に寸分狂わず逃え、細かいこだわりをもってつくるといふことより、そこで時間を過ごしたいと思える空間をどうつくれるか、というもつと骨太のことで設計する、というような。

**堀部** もうひとつ僕が日頃感じるのは、公共建築は不特定多数の人を相手にして、住宅は特定の人を対象にするという考え方が一般的なのですが、実は住宅のほうが不特定多数を相手にしていると思うのです。美術館には美術を見たい人が、市役所には用事のある人が出向きます。絶望に打ちひしがれる人が行くわけではありません。一方で住宅は、病むこともあれば明るい未来を思い描いていることもあるというふうに、さまざまな心身の状態にある住まい手のすべての状況を受け入れなければならない宿命にあります。そうしたなかなか読めない状況も、「太っ腹」に繋がられないでしょうか。太っ腹は利他的とも違いますね。

**青木** 人のさまざまな気持ちの変化を受け止める許容力をもった家ということですね。どんな状況でも受け止めるというのはフレキシブルとかニュートラルということではぜんぜんなく、大きくそれこそ「太っ腹」ということなのでしょう。

**堀部** ユニバーサルデザインに許容力があるかという、そうではありません。何でもできる可能性をもつことが必ずしも許容力があるというわけではありません。

**青木** 家があつ境界を物質的、精神的にどう広げられるかということだけでなく、そうした家の質についても考えてもらえるといいですね。

**平田** 太っ腹な人の周りにはいつも人が集まりますね。人が集まってきて、なんとなくその人がひとりにはならない感じというのでしょうか。受け入れるだけではなく、太っ腹性を発散しているような家がいいと思います。また、太っ腹な状態を持続できる仕組みまで提案できなくてはいけないと思いま



見つめることにもなるのではないかと考えました。前回の2次審査では、みなさん高い水準のものをつくられているのですが突出する案がなく、審査委員のみなさんが迷われていましたので、ぐっと抜きん出てくる作品が生まれるテーマになるとよいと思います。

**南川** 「寛容な家」の「さまざまな人を拒まない家はできるだろうか」という問いかけは魅力的で分かりやすいですね。

**青木** 「太っ腹な家」を発展させて「寛容な家」となったとのことですが、たとえば「太っ腹な人」だとどんな人物かイメージがつきやすいのに対して、「寛容な人」は抽象的な言い方で、意味の幅が大きく、イメージしにくいですね。「寛容」と言うか「太っ腹」と言うかでだいぶ差があります。「愛の家」は、愛の対象に他人がとやかく言うことはできず、またその対象が変わっていれはばいるほど案にインパクトが生まれるでしょうから、客観的な議論が難しいと思います。「私は白蛇を愛しているので、こんな家を設計しました」と言われても、「ほほう、そうですか、いいですね!」としか反応しようがありません(笑)。

**平田** 「愛の家」は一見誰にとっても取りかかりやすいテーマですが、実は深いのだという提案を期待しているので、確かに内向的な案が出てくる危険はあります。

**南川** 「愛」というと、地球環境のように大きなものから個人の身近なものまで範囲がとて広いので、提案はよくも悪くも幅が出そうです。

**堀部** 改めてこの4案を俯瞰してみると、どれもすべてが他者と自分、私有地と公共空間の境界の話をしていると思います。その境界がかなり利己的な方向に偏ってしまっているから、その境界をもっとぼやかしていくということになりますね。境界の定め方、広げ方を物理的なところ取るのか、時間的なところ取るのか、内面的なところ取るのか。「庭としての家」は物理的なところになりますね。

**青木** 「どこまでが住宅か」は、南川さんがおっしゃられたように、物理的な境界と概念的な面での境界と、その両面の境界に触れますね。だからもしかしたら、住宅についての先入観を変えてしまうような面白い案が出てくるテーマだと思います。アメリカに「WeWork」というシェアオフィスを運営する企業があつて、今年2月に日本に上陸しました。その評価額は、UberやAirbnbに次ぐ2兆円だそうです。次の事業として「WeLive」という住宅事業にも進出するようです。こういうサービスが広がっていくと、まず家があつて、その外にはっきりと輪郭をもった独立した空間としての仕事場があるという、これまで当然だった都市環境ががらっと変わってしまうかもしれません。生活と仕事、あるいは家とその外を分ける境界が、共有形態によって溶けていくことが、すでにビジネスとして成立するのだとしたら、家の側からも一歩、外に向かって共有を広げていくこともできるのかもしれない。だから、「どこまでが住宅か」というテーマは興味深いのですが、それを取っ掛かりやすく言えば、「太っ腹な家」と

